GEOPARKS JAPAN
日本ジオパーク

どんな気象?!
どんな災害?!

中四国近畿の ジオパーク から見る 気象災害 Oh! 話 MAP

気象災害 Oh! 話 MAP

「中四国近畿」と言っても、各地で気象は異なります。異なる気象を生み出したもの ... それは、地域を作る険しい山、低い山、暖かい海、寒い海などのさまざまな大地や海流に影響された空気たち！そんな気象は時々、私たちに牙をむきます。豪雨、台風の襲来、大雨による土砂崩れ、河川の増水、高潮 ...etc. 過去に何度も気象による災害を受けてきました。

それでも先人たちは、この地で暮らし、その脅威や教訓を後世に伝えてきました。

今回、私たち中四国近畿地域の先人たちが体験した気象災害、そして言い伝えてきた気象災害について一部マップ化しました。

きっとこのマップを見終わった時、中四国近畿地域の気象の多様性、そして様々な気象災害を乗り越えて暮らしてきた人々の工夫を感じられると思います。

この MAP の読み方

STEP 1 住んでいる場所に近い地域の特徴や云われを見てみよう

STEP 2 他の地域の特徴やいわれを見てみよう

STEP 3 似たような話... 全く違う話... どんなことに気づいたかな?

Let's GO！

1. 山陰海岸ユネスコ世界ジオパーク

Sanin kaigan Geopark
山陰海岸ジオパーク

主な気象災害：大雪　洪水　干ばつ　飛砂

地域の気象の特徴

日本海側の気候は、冬の厳しい寒さと夏の蒸し暑さが特徴。特に冬は、北西の季節風が日本海から水蒸気を運び、大雪を降らせることがある。この雪解け水は豊かな水資源となり、農業や生活用水として地域の暮らしを支えている。

気象や気象災害に関するいわれ・言い伝え

三八豪雪を忘れない

但馬文教府・教育塔

1963（昭和 38）年に日本海側では、記録的な大雪（三八豪雪）に見舞われ、但馬地方では、203 戸の家屋が全半壊し、7 名の児童を含む 17 名が犠牲となりました。後に、但馬文教府に建立された教育塔には三八豪雪のことが刻まれています。

MAP ①-1

古来の治水工事の伝承

出石神社

豊岡市を流れる円山川は、古来より氾濫川として知られています。その昔、アメノヒボコが但馬を訪れ、円山川河口を塞ぐ大岩を切り開き溜まっていた泥水を海に流した、という治水工事の伝説があります。出石神社にはアメノヒボコが祀られています。

MAP ①-2

大干ばつを免れた雨乞い踊り

因幡の傘踊り

鳥取県東部を中心に伝わる雨乞い踊りと初盆供養の民俗芸能です。この傘踊りのきっかけは、1786（天明 6）年の大干ばつに遭った際、雨傘に幣をつけ、神楽歌に合わせて踊ったところ、雨が降って干害を免れたことが由来となっています。

MAP ①-3

飛砂に埋もれた村

おこう野村伝説

おこうの村は京丹後市網野町にある俵野地蔵群の辺りにあったと言われる村です。その昔、飛砂で埋もれ住めなくなり 5 つの村（現在の俵野、溝野、上野、鹿野、葛野）に移転しました。この時、5 つの村の名前に「野」をつけたと伝えられています。

MAP ①-4

2. 隠岐ユネスコ世界ジオパーク

Oki Islands Geopark
隠岐ジオパーク

主な気象災害：大雨　土砂崩れ　洪水　干ばつ　強風

地域の気象の特徴

対馬海流の影響による海洋性の気候のため、冬の寒さと夏の暑さが控えめ年中通じて雨が降り、湿度も高い。

気象や気象災害に関するいわれ・言い伝え

大蛇の恩返し

隠岐の島町では昔から大雨による洪水や土砂崩れが多く発生しています。昔、隠岐の島町五箇の南方で大洪水がありました。南方の居里の前に流れ着いた大蛇が木材の下敷きになって動けなくなっていましたが、住民が助けて、もとの棲みかまで戻してあげたそうです。その時のお礼に、「日照りで困ることがあれば大雨を降らせる」と大蛇が住民に約束してくれました。住民は、そのことをいつまでも忘れないよう水神さんとして重栖川のほとりにほこらをまつり、今でも大切にしています。

MAP ②-1

天とつながる神の島

星神島

西ノ島町には大きな河川がなく淡水資源に恵まれておらず、畑作と放牧を繰り返す牧畑（まきはた）が昭和 35 年頃まで営まれてきました。そのような西ノ島では雨は貴重で、北にある無人島「星神島」で、昭和 30 年頃まで雨乞いの神事を行っていました。この島は星の神「鹿賀瀬雄命（かがせおのみこと）」を祀っており、昔から天につながる場所として、頂上にある池から竜が天に昇り、雨を降らすとされて崇められてきました。現在この島は、オオミズナギドリの一大繁殖地として天然記念物に指定されています。

MAP ②-2

大干ばつを免れた雨乞い踊り

皆一踊り

知夫村に伝わる雨乞いと豊作祈願の行事です。一説では鎌倉時代から始まったとされていますが、詳しいことはよくわかっていません。かつて田んぼの水が枯れて不作にならないよう降雨を祈願し、踊っていたのが始まりとされています。現在では稲作を生業とする家庭はなくなりましたが、毎年旧暦 8 月 15 日、天佐志比古命神社の境内に地域の住民が集まり、太鼓の音に合わせて、歌をうたいながら扇子 1 本を持って踊ります。島根県内では、このような雨乞いの行事は珍しく、知夫村の無形民俗文化財に指定されています。

MAP ②-3

3. 島根半島・宍道湖中海ジオパーク

島根半島・宍道湖中海ジオパーク

主な気象災害：大雨　土砂崩れ　洪水

地域の気象の特徴

寒候期（10月-3月）は、日本海からの気流がもたらす影響で、東部ほど厳しい気象条件にある。宍道湖・中海の水深が浅いため、豪雨に見舞われると浸水を度々起こす。

気象や気象災害に関する云われ・言い伝え

鉄穴流しが作り出した斐伊川の地形

昭和 47 年の出雲平野の浸水

中国山地から出雲平野に流れ込む斐伊川は天井川であり、度々氾濫を繰り返してきました。斐伊川が天井川である理由として、この地域で行われてきた「鉄穴（かんな）流し」が関係しています。鉄穴流しは、江戸時代に中国山陰地方で大規模に行われた砂鉄の採集方法で、砂鉄以外の土砂を川に流し込んでいました。そのため、川底に堆積する土砂が多くなり、天井川となる要因となっています。昭和 47 年には宍道湖があふれる程の豪雨災害が発生し、それが契機となり上流ではダム、中流では日本海への放水路が完成し、下流では河川の拡幅工事が進められています。

MAP ③-1

人柱伝説のある橋

松江大橋

松江城下町のある橋北エリアと松江駅のある橋南エリアを結ぶ松江大橋の建造は、堀尾吉晴が君主として出雲に配置された慶長 12（1607）年まで遡ります。松江城築城のための材料を運ぶため、架橋工事をしましたが、地盤が軟弱で難行しました。そこで最終的に人柱をたて、ようやく橋は完成しました。しかしその後、日本海に注ぎ込んでいた斐伊川が流路を変え、橋は度々水害を受け、何度も架け替え工事がなされてきました。その工事ごとに橋の安寧を願うため、橋の名前も変わりました。「松江大橋」という名前になったのは明治 7（1874）年のことです。小説『怪談』で知られる作家、小泉八雲も『知られぬ日本の面影』で人柱について記しています。

MAP ③-2

神話「ヤマタノオロチ伝説」に宿る

治水の教訓

ヤマタノオロチ伝説は、島根県を代表する神話の一つで、その正体は古代の斐伊川だったとする説があります。かつて斐伊川は氾濫を繰り返し、出雲平野に大きな被害をもたらしました。この荒々しい川の姿が、八つの頭を持つ恐ろしい蛇として語られたと考えられます。現在では、斐伊川放水路をはじめとする治水事業が進められ、氾濫は抑えられています。ヤマタノオロチ伝説は、自然災害への畏怖と治水の重要性を伝える教訓として現代に引き継がれています。

MAP ③-3

4. 萩ジオパーク

HAGI GEOPARK

主な気象災害：大雨　洪水

地域の気象の特徴

気候は、沿岸部においては対馬海流の影響を受けて比較的温暖であり、中山間部においては盆地特有の気候で、変化に富んだ豊かな自然環境を有している。

気象や気象災害に関するいわれ・言い伝え

天保申年洪水供養塚

萩市椿地区は、周囲を流れる阿武川が作った沖積地や大屋川が作った扇状地の上にあります。度々この地域では河川が氾濫し、浸水被害を受けてきました。天保 7（1836）年 6 月 11 日の夜から 12 日の朝にかけて大雨が降り、萩の城下町の 8 割が浸水し、200 名以上の方が亡くなられました。

この犠牲者を供養するための塚が築かれています。

MAP ④-1

洪水時の水位が刻まれた灯籠

萩市下小川地区では、田万川カルデラの影響で川幅が狭くなっており、大雨時には度々洪水が起こる場所です。

大正 8（1919）年 7 月 4 日の大雨により、田万川の堤防が決壊したことにより、水田の 7 割が浸水しました。

この時の水位が、勝馬田八幡宮境内にある灯籠の竿の部分に刻まれています。

MAP ④-2

平成 25 年 7 月の集中豪雨

平成 25（2013）年 7 月 23 日から 7 日間にかけ萩市東部（須佐・田万川・むつみ）、阿武町、山口市阿東を中心に大雨が降りました。なかでも 28 日には、3 時間で 301.5mm の降雨を記録する大雨となり、多くの人的・物的被害がでました。須佐地域や田万川地域周辺では、この時の浸水の位置が標示されています。

MAP ④-3

5. Mine 秋吉台ジオパーク

That's Mine, It's Mine
Mine秋吉台ジオパーク

主な気象災害：大雨　土砂崩れ　洪水

地域の気象の特徴

中国山地の西端に位置し、標高 700 m程度の山々に囲まれる。

年間平均気温は約 14℃で、気温の日較差と年較差がともに大きい。年間平均降水量は約 2,000 mmで、降水量は梅雨期に最も多く、次いで台風の来る 9 月に多い。

気象や気象災害に関するいわれ・言い伝え

石灰岩地域での地下水の噴出

エリア中央部に広がる石灰岩地域では、石灰岩が雨水や地下水に溶けて、地表には窪地が、地下には洞窟が多数存在します。雨水は、通常は地下へと浸透しますが、大雨が降ると、地下水位が上昇して地上に噴き出します。右上の写真はそのときの様子で、住民はこのあたりを「沼」という地名で呼んでいます。他にも、窪地の底で、湧き水が数ｍ流れて、再び地下へと浸透する「帰水」では、大雨により、水深が数ｍ以上の一時湖が現れることがあります。

MAP ⑤-1

厚狭川の氾濫

厚狭川は、上流部では北から南に向かって、ほぼ直線上に流れています。しかし、硬い火成岩を侵食できずに、途中から流路が狭く、蛇行しています。上流部で大雨が降ると、蛇行部分や他の河川との合流部で氾濫し、近年では、平成 22（2010）年 7 月と令和 5（2023）年 6 月に、家屋の倒壊や浸水、鉄道の橋梁流出、（令和 5 年のみ）上水施設の冠水による広範囲での断水などが起こりました。

MAP ⑤-2

美祢地域に残る伝説

美祢瀬戸の百合花

この伝説は、男女の悲恋により、6 月の白百合が咲く頃になると、たびたび大雨で堤防が決壊して河川が氾濫し、村が濁流に飲み込まれ、農作物は被害を受け、住民の間では病気が流行したというお話です。その場所は、厚東川の狭隘部にあたり、かつては実際に氾濫がたびたび起こっており、堤防が整備された現在でも、洪水ハザードマップでは浸水域として設定されています。

MAP ⑤-3

6. 四国西予ジオパーク

四国西予ジオパーク
SHIKOKU SEIYO GEOPARK

主な気象災害：大雨　土砂崩れ　洪水　干ばつ　強風　高潮　大雪

地域の気象の特徴

山間・内陸部は急峻な地形や盆地を有し、年間平均降水量が 3000mm を超える地域もある。梅雨期に降水量が多く、冬季も降雪しやすい特徴がある。沿岸部は温暖で、台風時には強風も吹く。

気象や気象災害に関するいわれ・言い伝え

記憶に新しい西日本広域を襲った豪雨

肱川の氾濫 - 平成 30 年 7 月豪雨 -

平成 30（2018）年 7 月 7 日、未曾有の豪雨が西予市を襲いました。台風 7 号と梅雨前線の活発な活動、それに伴う線状降水帯によってもたらされた雨により、エリア内山間部などで土砂災害が多数発生し、また肱川では短時間で降雨量が増えたことによる河川の氾濫が発生しました。

この氾濫により、野村町の中心部が次々と飲み込まれました。その洪水量は東京ドーム約 5 杯にもおよぶ約 650 万ｍ³にもなり、5 名の尊い命が奪われ、ピーク時には西予市全体で 954 名が避難しました。

MAP ⑥-1

約 40 日間も孤立が続いた

三八豪雪による集落孤立

大野ヶ原地域は、標高が 1400m 前後に位置し、夏は冷温、冬は数十 cm 以上積雪する地域です。気候を活かした酪農なども行われている地域です。冷涼な気候を活かした農業や酪農なども行われている地域です。

昭和 38（1963）年に日本列島を襲った「三八豪雪」により大野ヶ原地域では、5ｍを超える豪雪に見舞われ、陸の孤島となりました。40 日間も牛乳の出荷が途絶え、大量の牛乳を廃棄せざるを得ない状態となりました。この豪雪により、集落の孤立が続いたため、自衛隊による救援活動が行われました。

MAP ⑥-2

土砂災害を今に伝える蛇骨堂

西予市宇和町多田地区にある大安楽寺の参道に蛇骨堂があります。これは、鎌倉時代にこの地を治めた宇都宮永綱が人々を悩ませる大蛇を退治したところ、その後不吉な事が度重なり、大蛇の祟りを防ぐために建てられたお堂です。この蛇骨堂の裏側の山は土砂災害警戒区域に指定されており、大雨による山の土砂崩れを蛇が通っているかのように先人は見てみたのではないか、と考えられています。愛媛県の歴史文化に詳しい専門家によれば、蛇の伝説は、その地域が土石流の度々生じる所であったことを示しているらしく、災害の困難を乗り越えて開墾し人が住むようになった証であるとの話でした。

MAP ⑥-3

7. 南紀熊野ジオパーク

NANKI KUMANO GEOPARK
南紀熊野ジオパーク

主な気象災害：大雨　土砂崩れ　洪水　強風　高潮

地域の気象の特徴

太平洋と紀伊山地に挟まれた南紀熊野では、黒潮の影響で湿った海からの空気が山地にぶつかり雨を降らす多雨地域で、台風の上陸も多い。年間降水量が 4000mm を超えることもある。

気象や気象災害に関するいわれ・言い伝え

土石流犠牲者の供養塔

色川の土石流犠牲者供養岩

山の斜面に集落が点在する色川地区は、豪雨による土砂災害が度々発生しています。過去の土砂災害により、山間部から運ばれてきた巨岩が集落内に点在しています。

弘化 3（1846）年に発生した土石流によって流れてきた巨岩により、この地域の住民が犠牲となりました。その後、人々はこの巨岩を供養塔とし、犠牲者を供養してきた歴史があります。この巨岩は、那智勝浦町の災害の歴史や地質を知って後世へ警鐘と啓発を促すために、那智勝浦町の文化財（史跡）に指定されています。

MAP ⑦-1

地名は語る、警告する

日足地区と災害地名

新宮市日足地区を流れる熊野川は日足地区より下流は固い火成岩の中を流れるため、上流と比べて極端に川幅が狭まります。そのため、洪水時は川幅の狭い下流に水が流れにくくなり、水の流れが滞ることでこの地域で氾濫が起きやすくなります。また、日足という地名は「(水に）浸（ひた）る」が語源だとも言われています。他にも南紀熊野では、杭（くい）や葛（くず）が入る地名の土地は「崩（く）える、崩（くず）れる」から崩れやすい土地であることなど、地名が過去の災害と関係している可能性があると考えられています。

MAP ⑦-2

洪水と戦う人の歴史

富田川と彦五郎堤防

上富田町は昔から富田川の氾濫に悩まされていました。そこで氾濫を防ぐために堤防を作り、そこに彦五郎という村人を人柱として埋めたという「彦五郎堤防」の伝説が残っています。彦五郎堤防付近では、作られた場所と時代が異なる地層が隣り合っており、上流のほうが下流よりも地層が固いという特徴があります。そのため、下流側は広く低い平野が広がり、田畑や住宅に利用されやすい一方、広く洪水が起こりやすい場所でもあったので、そこに堤防が作られました。

MAP ⑦-3

8. 室戸ユネスコ世界ジオパーク

Muroto Geopark
室戸ジオパーク

主な気象災害：大雨　土砂崩れ　洪水　強風　高潮

地域の気象の特徴

黒潮の強い影響により、温暖・湿潤で台風も多く襲来する。年間平均降水量は 2000mm で、夏－秋に雨量が多く、山側、東側の地域で雨が多い。台風などによる風雨から免れるために、「水切瓦」や「いしぐろ」などの建築的な工夫を施した家屋が多く現存している。

気象や気象災害に関するいわれ・言い伝え

昭和 9 年の室戸台風

昭和 9（1934）年 9 月に室戸に襲来した室戸台風は、数多くの高潮や風雨の被害をもたらしました。

9 月 21 日午前 4 時、突如大暴風雨が襲来し、風速 66m、気圧 912hPa を記録しました。高潮により沿岸の人家は全滅し、室戸警察署管下において死傷者 359 名、家屋の全壊流出 700 戸超など大きな被害がでました。この碑は高潮襲来地点に建ちます。室戸岬より西側に 8 箇所、この被害について記した石碑（自然災害伝承碑）が建てられています。

MAP ⑧-1

吉良川のまちなみ

室戸は太平洋に突出しているため、風雨や台風などの影響を受けやすい地域です。そのため、白壁や水切り瓦の建物といしぐろなど、家を風雨から守るための工夫が様々に施されています。その特徴的なまちなみとして「吉良川のまちなみ」があります。吉良川のまちなみは、備長炭の繁栄と共に先人の手によって建築されました。平成 9 年 10 月 31 日に国の文化財である「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

MAP ⑧-2

自然と向き合った生活

室戸は古くから台風をはじめとした風水害に悩まされてきた地域です。そのため、室戸の一部の集落では、暴風雨から家屋を守るために高い石垣やコンクリート塀が家の周りに築かれ、まるで要塞のように見える家屋もあります。石垣の他にも高い生垣を持つ家もあり、自然をありのままに捉え、それらと共生する生活の工夫が見られます。

MAP ⑧-3

9. 土佐清水ジオパーク

Tosashimizu Geopark
土佐清水ジオパーク

主な気象災害：大雨　土砂崩れ　洪水　強風　高潮

地域の気象の特徴

黒潮の強い影響で、高温多湿のため、雨が多く、台風も多く襲来する。地域北部に位置する、地域で最高峰の今ノ山（868m）の影響で雨が多い。

気象や気象災害に関するいわれ・言い伝え

大正 9 年 8 月の豪雨災害

大正 9（1920）年 8 月 15 日、大雨により、下ノ加江川流域は一面の泥海となり、田畑はほとんど砂礫の原となりました。特に永野堰堤より小方堰に至る堤防が 500 余間決壊したため、60 余町歩が荒れ地となりました。また市野々地区では 30 余町歩が砂礫の原となり、全戸が浸水、このうち 2 戸が流失しました。この洪水は平水よりも 17 尺の増水であったという記録があり、この水害の様子や被害状況、復興への歩みなどが下ノ加江川の下流域に点在する石碑に刻まれています。

MAP ⑨-1

平成 13 年 高知県西南豪雨

平成 13（2001）年 9 月 6 日、活発な秋雨前線の影響を受けて、高知県西南部では断続的な豪雨となりました。5 日 23 時から 7 日 10 時までの総雨量は 500mm を超え、河川は急激に増水し、住宅や田畑に被害をもたらしました。土佐清水市の宗呂川の下流域では、氾濫で地区全体が水没しました。この災害で、死者・行方不明者はなかったものの、土佐清水市と大月町で重軽傷者が 5 人発生、土佐清水市では橋の崩壊により 8 つの地区が孤立状態になりました。

MAP ⑨-2

土佐清水に残る川の流路に関する言い伝え

三崎川の流路変遷

三崎地区を流れる三崎川の周辺には水田が広がり、農業が盛んです。この三崎川は過去から複数回その流路が変化していると考えられています。三崎地区の地層は、竜串海岸などで見られる地層と同じく、周囲の地質と比べボロボロになりやすい（風化しやすい）岩石でできています。そのため周囲よりも早く侵食されて窪地をつくり、そこに三崎川が土砂を運び込むことで平地ができました。この平地の中の地形には、これまでに三崎川が流路を変更してきた証拠が残っています。さらに、地域に残る言い伝えで三崎川が流れていたとされる場所は現在の流路とは異なっており、地域伝承からも三崎川が幾度も流路を変更してきたことがわかります。

MAP ⑨-3

10. 三好ジオパーク

三好ジオパーク
Miyoshi Geopark

主な気象災害：大雨　土砂崩れ　洪水　干ばつ　強風　大雪

地域の気象の特徴

季節風の影響で、大雨・大雪が多い。吉野川の上流域では、年間平均降水量が 3000mm を超える場所があり、一度の降雨量が多い。そのため河川が増水し、中下流域では洪水に見舞われる。剥がれやすい岩石など地質的な特徴も起因し、土砂災害が多い。

気象や気象災害に関するいわれ・言い伝え

妖怪伝承の中に残る「土石流災害」

クモトリ淵の一つ目入道

山城町には数多くの妖怪話が残されています。その話の一つに、「土石流」を物語る妖怪話「クモトリ淵の一つ目入道」があります。

これは、山城町の藤川谷川上流の小川地区のお話で、「山仕事をしていた男が大雨の夜、山小屋で眠っていると、一匹の蜘蛛がその男の足に糸を巻きつけては小屋の外に出る ... を繰り返しているのを見つけました。気味が悪くなり、足の糸を小屋に巻きつけて眠っていると突然小屋ごと近くの淵へ引きずりこまれてしまいました」というものです。

MAP ⑩-1

吉野川の洪水で流れてきた御神体

流れの宮さん（勢力神社）

三野町に鎮座する勢力神社の由来が吉野川の洪水と関係しているといわれています。

大昔、三好町足代の宮谷地区にあった杉尾大明神が、洪水によって勢力地区の愛神古墳に漂着しました。足代の宮谷地区の氏子たちは、漂着した神様をお迎えに行きましたが、神主は神様の思し召しをおみくじに託して引いたところ、神様が勢力の地に祀ってもらいたいとの意向を示されたとのことです。以来、勢力地区の氏神様として祀られているそうです。

MAP ⑩-2

吉野川の洪水を防ぐ竹林と堤防建造の歩みを記す

西庄水防林記念碑

明治 32 年（1899）7 月 9 日の吉野川の大洪水により、吉野川下流域（下郡）では溺死者 150 名、家屋流失 500 戸の大被害が生じました。上流の旧加茂村でも、流失家屋 6 戸、浸水 100 戸との記録があります。この災害を機に吉野川沿いには水防竹林が造られました。水防林は、洪水による浸食から川岸や堤防を守ることや、洪水の水勢を弱めて家屋の流失を防ぐなどの役割を果たしてきました。

この吉野川沿いに造られた水防のための竹林の歴史やその後の堤防建設の歩みについて記した石碑が東みよし町西庄にあります。

MAP ⑩-3